

関西大学国文学会集報

二、関西大学国文学会研究発表会

◇第一回国文学会研究発表会

日 時 平成二十七年七月四日(土) 午後二時より

会 場 文学部第一学舎 A三〇一会議室

研究発表

「在原元方の評価に関する一考察」

本学大学院博士後期課程 坂本 美樹

「松尾芭蕉論の発句における中国語訳

——日中の伝統的美意識に基づく発句翻訳の可能性——」

本学大学院博士後期課程 胡 文海

「古今和歌集」仮名序の仮名文字遣について

——「お」「於」「を」「越」を中心として——」

本学大学院博士後期課程 松本 美恵

「英霊」の語誌——「英華秀霊」から「戦死者」へ——」

本学大学院博士後期課程 利岡 真帆

一、平成27年度関西大学国語国文学専修年間行事

平成27年6月9日(火) 二年次生文楽鑑賞教室

(於 国立文楽劇場)

7月4日(土) 第一回国文学会研究発表会(後掲)

10月8日(木)～9日(金) 三年次生宿泊セミナー

(於 高槻キャンパス高岳館)

11月26日(木) 院生合同学術研究会

12月12日(土) 第一回プレ・ステューデント・プログラム

12月19日(土) 第二回国文学会研究発表会(後掲)

平成28年1月23日(土) 第二回プレ・ステューデント・プログラム

3月12日(土) 第三回プレ・ステューデント・プログラム

3月15日(火) 新二年次生対象専修別履修ガイダンス

(国文学会主催ポスターセッション併催)

◇第二回国文学会研究発表会

日 時 平成二十七年十二月十九日(土)

午後二時三十分より

会 場 文学部第一学舎 A三〇一会議室

研究発表

「井上靖「桜蘭」論

——「桜蘭」における「水」と「ロブ湖」の意味を中心に——

本学大学院博士後期課程 蘇 洋

「司馬遼太郎「倉敷の若旦那」論

——その語りと登場人物について——

本学大学院博士後期課程 森 瑠偉

講 演

「火野葦平の平和活動

——「アジア諸国会議」から、中国へ——

本学教授 増田 周子

三、関西大学国文学会研究発表会 発表要旨

なお、成稿し、本号に掲載したものについては省略した。

◇第一回国文学会研究発表会（七月四日）

研究発表

「在原元方の評価に関する一考察」

坂本 美樹

（本号掲載）

「松尾芭蕉論の発句における中国語訳

——日中の伝統的美意識に基づく発句翻訳の可能性——

胡 文海

（改題後、本号掲載）

『古今和歌集』仮名序の仮名文字遣について

——「お」「於」「を」「越」を中心として—— 松本 美恵

仮名序を有する写本『卷子本』『元永本』『清輔本（宮本本）』

（以下『宮本本』とする）『清輔本（前田本）』（以下『前田本』

とする）『伊達本』『嘉禄二年本』を対象とし、仮名文字遣につ

いて検証を行った。

各写本に見られる「お」「於」「を」「越」の使用数の分析よ

り、『宮本本』『前田本』『伊達本』『嘉禄二年本』において「お

より「於」が優勢であることが明らかになった。また、「越」の

助詞以外の使用例は『元永本』『宮本本』に各一例ずつであっ

た。更に、『宮本本』、『前田本』においては「お」「於」と「を」
「越」の混同が見られた。『宮本本』における混同は「さかえお
こりて」に相当する部分であり、「さかえ越こ里弓（栄え傲り
て）」という箇所であった。これは前行にある「水乃あ者越みて
（水の泡を見て）」という表記からくるぎなた読みに属する書き
間違いによる仮名文字遣であると考えられた。『前田本』におい
ては助詞「をも」を「於も」とする仮名文字遣が見られた。こ
れは「つらね歌」からくる和歌に見られる掛詞の用法と同様と
みられ、同じく清輔本系統に属する『宮本本』には見られない
『前田本』特有の用法であることが確認できた。『伊達本』『嘉禄
二年本』においては「越」は助詞としての仮名文字遣が主であ
り、『伊達本』に見られる「あ越やぎ」については「あ越やぎを
や」と行替えることなく書かれている箇所であることから「あ
をやぎをや」と書くことによる見間違えを回避した「変字」で
あると考えられた。これらのことから「仮名序」においては
「越」は「を」に属する表記であり、「越」^{II}「お」とする用法は
「つらね歌」に見られる和歌に現れる用法であるため、「越」を
「お」の代用とする仮名文字遣の概念は、散文である「仮名序」
には無かったのではないかとという検証結果となった。

「英霊」の語誌——「英華秀霊」から「戦死者」へ——

利岡 真帆

「英霊」とは『日本国語大辞典 第二版』によると「(一)〔英
華秀霊〕の気の集まっている人の意) すぐれた人。また、その
魂。英才。(二) (形動) 才能、体格などのすぐれているさま。」
のように生死に関係なく靈魂や性質・才能などがすぐれている
という意味と、「(三) 死者の靈魂を尊敬するという語。明治以後
は戦死者の靈をいうことが多い。」のように死者の尊称としての
意味とがある。この死者の尊称は明治以後、戦死者を指すこと
ばとして使用されており、実際に連合軍最高司令部民事検閲局
の「プレス・コードにもとづく検閲の要領にかんする細則」に
おいて「7. 「大東亜戦争」「大東亜共栄圏」「八紘一字」「英霊」
のごとき戦時用語の使用を避けなくてはならぬ」と記されるほ
ど「英霊」は戦死者を指すことばとして認識されているようだ。
そこで、雑誌や新聞、弔辞を用いて「すぐれた人」といった意
味であった「英霊」がいつごろから戦死者を指すようになった
のかという「英霊」の語誌を明らかにする。

調査の結果、「英霊」は一八九五年から戦死者に対して使用さ
れはじめ、一九三七年から一気に使用数が増加している。これ
は、日清戦争という今までは違う国家間の大規模な戦争が始

まったことにより、戦死者の靈魂を称えることとはして「英霊」が採用されたと考えられる。そして靖国神社での臨時大祭の報道などで徐々に浸透し、日中戦争を契機に一気に増加したと考えられる。このようにして「英霊」＝戦死者という関係が浸透したことにより言論統制の対象へとなっていったのである。しかし、新聞などでは主に戦死者に対して使用されているが、弔辞では戦死者以外の教職者や社長など一般の人に対しても使用されている。つまり、「英霊」は場面によって用いられ方が異なり、弔辞での対象者の広がりとは特徴的なものだということが明らかになった。

◇第二回国文学会研究発表会（十二月十九日）

研究発表

「井上靖」「桜蘭」論

——「桜蘭」における〈水〉と〈ロブ湖〉の意味を中心に——

蘇 洋

「桜蘭」は、井上が創作した西域小説群の一つで昭和三十三年七月の『文藝春秋』に発表された。西域に短期間実際に存在したロブ湖畔の小さな国、桜蘭の興亡史を描いたものである。

歴史小説を書く際、井上は史料を詳細に調べた上で、史実の間隙を空想で埋め、創作する。西域を扱う場合、現存する史料が比較的少ないため、西域小説群は井上の創造部分が多いのも特徴である。

まず、本発表では、桜蘭という小国を描くために井上が使用した史料『漢書』や『史記』と作品「桜蘭」との共通点や、意図的に改変したところを指摘する。桜蘭は、小国であるがゆえに、大国の匈奴と漢によって劫略され、漢の要求により国そのものをロブ湖流域から鄯善に移すことになった。桜蘭に関する研究者は、「鄯善」という国名は、「漢により善く善い国」という意味と指摘する。すなわち、漢という強国に従うという立場を明瞭にした地名だ。だが、井上は小説「桜蘭」の中で、「鄯善」とは、「新しい水」という意味だと書いたのである。井上は、いったい何故このように「鄯善」に独自の意味づけをしたのであろうか。それは、作品内での〈水〉の描写と深くかかわっている。〈水〉は小説「桜蘭」の中で、重要な役割を果たしている。桜蘭人にとって、ロブ湖は神であり、祖先であった。ロブ湖なしに、決して桜蘭人たちは考えることはできなかった。史料では、桜蘭は仏教国とされているが、ロブ湖の重要性を強調するため、作品内では、ロブ湖に棲んでいた神・河竜を登場

させている。楼蘭人は鄯善に移動したにもかかわらず、毎日のように河竜へ祈りを捧げていた。ロブ湖は楼蘭人にとって切り離すことのできない一部分と言える。

以上より、本発表では、小説「楼蘭」における〈水〉、〈ロブ湖〉及び〈河竜〉に関する描写を詳細に分析し、〈水〉や〈ロブ湖〉の意味と重要性を明らかにしていく。

「司馬遼太郎「倉敷の若旦那」論

——その語りと登場人物について—— 森 瑠偉
(本号掲載)

講 演

「火野葦平の平和活動

——「アジア諸国会議」から、中国へ—— 増田 周子

火野葦平は、公職追放解除後、自らの戦争体験を省み、平和活動に専念していく。中でも重視されるのは、国際緊張を緩和する目的で一九五五年四月六日から十日にデリーで開催された「アジア諸国会議」に日本の文化問題代表として参加したことがある。本会議には世界十四ヶ国、およそ二百人の人々が集まった。日本からは、团长松本治一郎他、三十四名の代表とオプザ

ーバー二名が正式に参加した。相互不可侵、原水爆兵器の使用と撤廃、アジア諸国との文化、経済交流などが決定され、アジアの未来永劫の平和維持と連帯を誓い合った。会議参加のみならず、火野は積極的にインドを視察し、カースト差別批判などをメディアに発信した。インド訪問後の四月二十日からは、日本代表団の一部二十八名と共に、新中国を視察した。広州、漢口、北京などを訪れ、冷静な観察を行った。比較的好印象の広州と比べ、密告や言論弾圧が蔓延する北京では、毛沢東の統治体制に疑問を抱いた。五月一日、メーデーで天安門上に遠く聳える毛を見ながら、氏の絶対的存在による不自由な政策が、日本の戦時中の、言論を奪うファッショ体制に似ていると気づき始める。最終的には、新中国は赤色全体主義が確立していると結論付けた。一九五〇年代に、火野が中国全体主義体制を批判していたのは重要である。戦争に利用、翻弄され、自省した彼だからこそ、冷静沈着に物事を見る目が備わっていたのであるうか。

本講演では、戦後七十年、火野の戦後活動を通して歴史を振り返り、平和社会の実現に今何が必要なのかを考えていきたい。

四、平成二十六年年度 卒業論文・修士論文・博士論文題目

◇平成二十六年年度 国語国文学専修 卒業論文

〔国文学〕

上田 香織 「銀河鉄道の夜」に描かれた幸せについて

佐野 智恵 宮沢賢治の魅力―賢治の理想の世界―

吉見麻衣子 『日本霊異記』に関する一考察

― 髑髏を題材とした二つの説話を再読する ―

赤田 大地 山崎豊子『大地の子』論

― 山崎の描いた戦争孤児とは ―

池口 直毅 団 鬼六『花と蛇』論―鬼六のSMとその魅力―

池田 真央 『男色大鑑』の特色について

伊尻 幸花 小野小町研究―古今集十八首―

一色 美穂 再生―村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」論―

江本 憲司 寺山修司の句作における意識の変化について

― 十代と三十代の句作を比較して ―

太田 大督 帝銀事件についての清張の疑問と推理

― 『小説帝銀事件』帝銀事件の謎』から読み解く―

大西佳奈絵 式子内親王の恋歌

大村 尚也 太宰治『グッド・バイ』論

― 戦後女性の姿容と解放について ―

岡村 菜奈 謡曲『橋弁慶』となぎなた

奥 麻奈美 『今昔物語集』に登場する動物

長田 奈緒 堀 辰雄『風立ちぬ』論―堀辰雄の死生観―

小野 晃信 見る歌の発想と表現―上代から中古への変遷―

川崎 美緒 川端康成「眠れる美女」論―作品に見る死生観と美―

北川 諒 子を儲けぬ「藤壺のゆかり」紫の上

― 『源氏物語』における寡産性と「母」―

暮松 美穂 藤原定家の書写態度―古典文学の価値―

越賀 翔悟 向田邦子研究「鮎」

― 作品に読み取る「喰い」への試み ―

児島 彩乃 室生犀星『蜜のあはれ論』―幻想世界への誘い―

駒井 大輝 能の作り物に関する研究

近藤 正 江戸手妻論―コインマジック考―

後藤 仁美 『源氏物語』と通過儀礼―袴着・元服・裳着―

芝藤 梨代 吉田兼好の「死」に対する意識

下村 真輝 紫の上の苦悩と出家願望

白樫 憲司 『源氏物語』における文の色に関する考察

須田 佳未 日中文学における桃崇拜の比較

——西王母から黄表紙まで——

千田 菜穂 表現規制問題に対する有川浩の姿勢についての考察

高松 美里 瀬尾まいこにおける「家族論」

瀧川 希恵 『源氏物語』における物の怪——六条御息所を中心に——

田中 千尋 近世の化粧観

田中 恵 物合について

谷口 貴哉 『源氏物語』と伊勢——女流文学の先駆者として——

玉木和由美 三島由紀夫の女性観——女性批判——

筑紫由果梨 金春禪竹作の『百人一首』引用

手塚 有香 女君の名と花——朝顔の姫君——

刀根 愛弓 『枕草子』における「藤」の意義

富永 麻央 中世前期における「婚姻」について

中井 颯太 村上春樹『風の歌を聴け』論

——平行世界における対となるものを巡って——

中嶋 仁志 『宇治拾遺物語』に描かれた「笑い」

中野 智絵 『百人一首』における定家の撰歌意識

——『三十六人撰』との比較を通して——

中村ちひろ 坂本龍馬とはどのような人物であったのか

並木由希子 能の季節考

西田袖依子 有川浩作品における恋愛論

西野 如葉 星新一「ポッコちゃん」論

——「ポッコちゃん」から見る星新一の女性観——

新田 有佳 庄野潤三「夕べの雲」論

——庄野の書く「いま」について——

平田 光宏 夢野久作『ドグラ・マグラ』論

——「私」から見る「構造」——

福上優香里 桜庭一樹が目指すもの

——桜庭一樹作品における殺人——

福田 泰葉 『源氏物語』における「手引きする女房」

——小侍従を中心に——

古川 凌 古代における「にほひ」「にほふ」の変貌

堀江 美帆 源氏物語「幻」の存在理由

——特異な巻きを読み解く——

牧野未佳子 英雄源義経の誕生

増田 早紀 宮本輝『花の降る午後』論

——『金縷』『避暑地の猫』から見る善人と悪人——

松藤のぞみ 紫式部の素顔——人物像の変遷を辿る——

間中真紀子 『大和物語』と『今昔物語集』の関係性

三谷 温子 神話「海幸彦・山幸彦」と浦島伝説の関連性

宮下 夏実 『源氏物語』における雪——物語の雪がもたらす効果——

森田 美咲 初期草双紙嫁入物と理想の結婚

山下 諒子 井伏鱒二「遙拝隊長」論

吉崎 孝 ライトノベル表現論
——橋本紡『半分の月がのぼる空』比較で見られる特徴——

吉田 涼香 『往生要集』と『今昔物語集』に描かれた地獄

吉田 晴香 『源氏物語』生霊事件からみる六条御息所の役割
——夕顔巻・葵巻を追って——

米本 舞子 金城一紀が目指す在日文学の未来
——村舜臣に込められた思いとは——

川本 彩純 西行法師の研究——月の恋歌から垣間見える西行の想い——

織野 杏子 三島由紀夫『女神』論——創り込まれた〈通俗的〉小説——

〈国語学〉

木戸 友也 相撲における、「寄る」の他動詞としての使用について

阿形 恒廉 形容詞型活用と形容動詞型活用をもつ語幹同形語の使い分け

乙武 真以 関西人にとって「バカ」「アホ」とは

北野 彩菜 「神」の歴史と現在

藏本 真由 「気がする」と「感じがある」の文法化

坂田 将規 関西における断り表現
——行けたら行くってどっちゃやねん——

穴戸 彩花 若年層流行語「それな」の方言性と使用実態

淡越 裕 名づけから見る日本人の男性像と女性像と人間像
「みたいな」にほかす意思はあるのか
——文末の引用表現からみる「みたいな」の実態——

日野 智美

福地 諒 ネットとリアルの新しい言語変化

福永 志帆 飲料水のパッケージデザインが消費者に伝えたいこと——書体を中心として——

福原 翔 オノマトペ「はらはら」の変遷

藤井 真理 「秋萩帖」の仮名——その多様性と使用実態について——

前田 夏美 「見せる」の謙譲語の変遷について

水島 秀僚 和歌山県有田郡湯浅町における僧侶の呼称についての研究

山本 綾香 『書札調宝記』における敬意表現について

吉崎 綾夏 関西方言「タール」の使い分けの要因を探る

◇平成二十六年九月期 修士(文学) 取得論文

〈国文学〉

顧 琦淵 安部公房「魔法のチョーク」論

——「アルゴン」に含まれる狙い——

蘇 洋 井上靖「孔子」論——「孔子」の詞とその背景——

〈国語学〉

馬 玉超 化粧品語彙の日中対照研究

◇平成二十七年三月期 修士(文学) 取得論文

〈国文学〉

日渡 佑 棄老説話における性差

周 双慶 開高健「玉、碎ける」論

浅田 孝祐 高等学校における国語科(古文)教育の検討

——徒然草を教材例として——

川畑 悠樹 『万葉集』「広瀬本」における書入の考察

寺田 伝 初期定家本『古今和歌集』の研究

長谷川達也 『宇治拾遺物語』所収「伯母事」の成立過程

——和歌説話の形成——

藤村 美緒 坂口安吾「信長」論——信長と濃姫——

佐藤 弓華 芥川龍之介「開花の殺人」論——知識人の葛藤——

〈国語学〉

岩下 真央 『小野篁諺字盡』についての研究

仇 子揚 近現代日中同型漢語の使用状況に関する研究

——軍用語をめぐって——

利岡 真帆 弔辞の談話構造と文体に関する研究

山本 空 方言談話における二人称代名詞の談話機能

◇平成二十七年三月期 博士(文学) 取得論文

〈国文学〉

立石 大樹 三代集の基礎的研究

福留 瑞美 奉納百首の表現史